

# インディアカゲームのケースブック

(2017 年度版)

一般社団法人日本インディアカ協会

# インディアカゲームのケースブック

このケースブックは、2017年度に実施した公認A級ならびにB級審判員研修会において研究協議された、2017年ルールを適用したレフリーの判断(ふるまい)の収集です。

競技規則の改訂及び構成の見直しは、ルールを分かりやすくすることと、インディアカ競技の将来を見据えて行われたものです。

参加された方からは「平成29年9月からのルールブックの全面的な構成の見直しと一部改訂での試合のトラブルはあまりなく、スムーズに進行している。」との状況も報告されています。

このケースブックが、インディアカゲームの審判に携わる方々の判断や疑問を解消する一助となれば幸いです。そしてインディアカゲームの運営が円滑に行われ、日々研鑽を積まれた審判員の方によってインディアカゲームをより公平公正で楽しいものにしていただけることを期待しております。

## 目次

1. 主審	……	2
2. 副審・線審	……	18
3. その他	……	22

(※ここに掲載しているケースの文章は、ケース提出者の原文のままです。)

## 1. 主審

### ケース1

Aチームのキャプテンから「Bチームのローテーションが間違っているのではないか」との質問を受けBチームに確認すると「間違っていない」とのことであった。副審と記録員に確認したが記録員は経験不足のことからいつの時点で、A・B両チームのローテーションが狂ったのか確認できなかったため得点はそのままとして質問をしたAチームのポジションをBチームに合わせてゲームを続行した。この待遇はいかがか？

### レフリーコード

主審の判断と行為は正しくない。

このケースのポイントは、主審がAチームからの質問内容を直接Bチームに確認したことにある。確認した行為でゲームはフェアネスでなくなっている。あくまでも審判団で対処すべきである。

副審（記録員との連携）の経験を積極的に積むことでサーバー誤りの対応はスムーズに進めることができる。

### ケース 2

東京体育館での全日本トーナメントは、決勝戦ではベンチが設置されているが、それまでのゲームはコートサイドがベンチです。その中で、他のチームの応援者が登録選手と並んで応援する場面が多々見られます。予選ゲームは各々のゲームに追われて他の仲間のチームを応援することはありませんが、ゲームが終わりに近づくと応援に行く人も増えてきます。

主審の時、真剣に審判を遂行していると応援者の侵入が判らない時があり、注意することを忘れたことがあった。チームを応援する声大きい時に、離れるように注意したこともあるが、このようなことを経験しました。

### レフリーコード

ゲーム運営の正しい認識が主審に必要。

ルールは競技参加者以外の者を規制していない。なぜなら当該試合の参加者のみ競技場に入れることを前提としているからである。ベンチコントロールはフェアネスな状態を保つ重要な審判技術である。

主審・副審はチームのメンバーを競技開始前に把握し、競技中も含め監視する必要があります。その様な状況があれば、主審は主将を通し、副審は監督（又は主将）を通し、排除します。

### ケース 3

アタックボールがレシーバーの手に当たり後方へ飛び空中で羽根が取れた。私は(主審)アタックヒットを宣告した。レシービングチームより「今のはノーカウントではないか？」との申し出があったが(通例ではノーカウントだと承知している)ボールがコート外に飛んだことや、ルールブックにはボール破損時の取り扱いを明記していないので、申し出チームにはその旨を通告した。試合は2分ほど停滞した。〔2015年の全国大会 於東京体育館〕

#### レフリーコード

主審の判定は間違い。

ラリー中にインディアカボールの羽根が空中で取れた場合は、プレイヤーに責任がなく用具(ルール第3条2)の不完全な状態と判断する。判定は羽根が取れた時点でボールデットとなり、ノーカウントとする。

インディアカボールが極端にコート外に跳ね、ラリーの継続が困難な状況下での羽根が取れた場合については、研修会での事例研究の課題としたい。

### ケース 4

市協会の大会のゲーム中2セット目に副審の方が体調悪くなり交替してほしいと訴えられました。審判団の線審2名記録員の方の中に副審の経験がなく、自信もない～との事でした。

審判団以外の点示の方が経験がありました。主審の判断で主将にも話をし、点示の方と副審の方が交代しました。

市町村レベルの大会なので主審の判断は正しかったでしょうか？

#### レフリーコード

主審の判断は間違いであるが、やむをえない状況判断か？

副審の経験の有無ではなく、公認審判員の資格取得者で構成されている審判団内の配置移行が基本である。ルールでは線審、記録員がいなくてもゲームを進めることが出来ることある。また、審判員の整列は、ゲームはこの審判員で行いますという意味がある。

## ケース 5

主審を務めた時、ブロック側のオーバーネットを疑いました。

インディアカボールには手が触れていなかったのですが、アタック側の手の影とかになるとブロック側の手がボールに触れたかどうかとっても難しいです。

### レフリーコード

ポイントに直結するネット付近(ネット上)のプレーの監視は、主審に委ねられている。アタック側チームのトスの位置でネット上での視線を保持します。この判断姿勢の状態で見えた事実のみ判断します。

## ケース 6

ゲーム中に副審がローテーションミスを指てきた所、選手とチームが納得せず、試合が中断したままで困りました。

### レフリーコード

主審は素早くレフリータイムアウトを宣告し、副審と共に問題の解決をしなければならない。

競技会場の都合で記録員の配置が困難であることは承知しているが、記録員がいることは重要である。

## ケース 7

副審がネット上のオーバーネットとのコールがあったが、オーバーネットではなかったのでラリーを続行し、後で副審に説明するとともに、副審の責任外であることを理解させた。

### レフリーコード

主審の判断と行為は正しい。

副審の責務の範囲はルールに示されている。

## ケース 8

副審側でAチームのラストボールがマーカ外(ギリギリ)を通過しようとしたとき、副審の吹笛と主審の吹笛が同時になり、主・副審の検討後主審タッチネットの吹笛の方が速かったと判断されゲームは続行された。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。

吹笛が同時の場合は、レフリータイムアウトを宣告し、確認し合うことが必要。主審は他の審判員の判定を誤審と判断した場合は、覆すことが出来るが、主審の吹笛を優先せず確認し合うことで両チームは納得する。

## ケース 9

タイムアウトを1回取っているBチームの選手が競技中に怪我をし、3分間のレフリータイムアウトを宣告しようとしたが、Bチームより怪我の選手を病院に連れて行きたいと申し入れがあった為、他に控え選手がいない為そのBチームの試合を没収した。

### レフリーコード

主審の判断は間違い。

チームからの申し入れがあっても、レフリータイムアウトを宣告し、ラリーを中断しているのは誰であるのかを明確にしなければならない。没収試合の結果も宣告しなければならない。

## ケース 10

バドミントン(シングルス・ダブルス両面コート)のラインが引かれたコートを使用してインディアカの試合を行っていた。

Bチームのサービスで始まったラリーは、Aチームからの打球をBチームが返球に失敗したためAチームはローテーションを行い、サーバーは、サービスエリアに向かって移動しながらインディアカボールを受け取った。

主審は、レシービングから両チームがプレーする用意ができていることを確認し、サービスを許可しようとした。

しかしそのとき、サーバーはエンドラインの内側に引かれたバドミントン・ダブルスのロングサービスラインをエンドラインと思い込み、コート内に位置したままサービスを打とうと構えていた。そのため主審は、数秒間サービス許可の吹笛を待った。しかしサーバーは、サービスエリアの誤りに気づかない、よって、そのままサービス許可の吹笛をした。サーバーは誤った位置のままインディアカボールを打ち放った。

線審がサーバーのフットフォルトのシグナルを示し、主審はフットフォルトの反則と判定した。

このような場合は、正しいサービスエリアから打ち放つよう指導すべきだったのでしょか？

## レフリーコード

主審の判断は間違い。

数秒間サービス許可の吹笛を待ったという行為は、ルール第10条第3項の主審がサービスを許可する規定に沿っていない。

参加者は、ルール第5条第1項の1に主将は、公式競技規則を理解し、これを守り、試合の規律について責任を負うという規定を理解していることが前提である。また、試合中に審判員から指導あるいは助言するという行為は許されない。

## ケース 11

ネット上での両チームの羽のプッシュにおいて、Aチームがオーバーネットと副審が指示したが、自分には判断しにくく、そのままラリーを続けた。その時、Bチームのメンバーからも「オーバー・ネット」という訴えがあった。ラリーの結果、Aチームの得点となった。ネット上でのプッシュでは、判断がわかりにくい事が何度かある。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。

疑わしきは判定しない。ルール第23条第3項の3に副審の責務としてネット下のオーバーネットの判定がある。ラリーの結果として副審との連携ミスが混乱を招いたことになる。

## ケース 12

主審をしている時にネットタッチをとったのですがネットタッチしてないと選手から言われ、してる様に見えましたと答えたがしてる様に見えたらなんでもフェアールとるのか！！とおこられたのですが副審と話をしてそのままネットタッチの判定をしました。

### レフリーコード

発言に対する主審の対応は間違い。

「タッチしていない！」という発言に、応える必要はない。「怒られた」と感じた発言は、ルール第19条第1項の1・2を適用し注意または罰則を適用します。

※「スポーツの規範」。



## ケース 13

Aチームからのアタック攻撃に対して、Bチームの選手がブロックに飛んだが、ブロックの手に当たらず、白帯に当たって、Aチーム側にはね返った。

それをAチームは4打以内でBチームに返球できなかつたので、主審は吹笛をしてゲームを止めオーバータイムスの反則を示したが、その場でブロックの手にも当たっていたことが判明した。両チームに謝罪してノーカウントと判定しなおした。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。

ネット付近のプレーにおいて、主審のオーバータイムスの判定に対し、Bチームからブロック接触の申し出があればノーカウントの判定をしなければ逆に不信感が漂う。

## ケース 14

①白熱するラリー中、個人の打数、チームの打数の上限が混合して、失敗してしまっただけです。

ブロック→ネット→あげる→別の人が打つチームの打数は4内ですが、(同一プレーヤー)

1人が3回さわっています。とっさに吹笛がおくれました。

②サーブを打ったとき、相手チームがアウトオブポジション、ただ、サーバーがフットフォルトの反則で、サーバーのアウトを優先して取りましたが、相手チームの方が反則ではないかと抗議をうけました。

③吹笛を素早くと思っているもののなかなか判断がおくれるので、練習あるのみです。

### レフリーコード

①のケースは、多くの試合を吹くことから吹笛が遅れることは少なくなる。

②のケースは、ルール第10条第6項を適用し、サーバーの反則を優先する。

③のケースは、自覚されている通り。

## ケース 15

主審をしていてAチームの攻撃でBチームのレシーバーがアンタッチと思ったのですが、主審からは背中しか見えず当たった場所が確認できなかったため副審を見ましたが、見えなかった様なので、そのままプレーを継続しましたが、Aチームからはアンタッチのアピールもありましたが、そのまま続けました。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。

判定は確認した事象だけである（見えた事に判断し、見えなかった事は、なかった事として続行する）。

## ケース 16

主審をしている時、副審側からの攻撃がポール上ぎりぎりで、外からか内からかよくわからなかったが、副審、線審ともシグナルがなかったため、そのままながして、試合を続けた。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。

判定は確認した事象だけである。

副審側のポール上のイン・アウトの判定は副審との監視連携が必要。

## ケース 17

線審のフットフォルトのシグナルに気づかずラリーを継続していました。Aチームからのサービスに線審はフットフォルトのシグナルを示した。そのシグナルに気づかずラリーを継続させる。ラリーの結果はAチームのポイントとなるが、Bチームからフォルトのシグナルがあったのではないかと質問を受ける。線審を呼んで確認したところ、フォルトがあったので主審のミスでノーカウントとしゲームをやり直した。

### レフリーコード

主審の判定は間違い。

線審のフットフォルトのシグナルとラリーの結果がプレイヤーに認識されている状況下での質問に対しては、主審は、線審に確認した時点で、先の反則（フットフォルト）を有効としなければならない。

ラリー中の判定と違い、サービスの判定は、サービス動作の足の位置とヒットポイントを注視することから始まるので、判定誤りがないのが原則である。

## ケース 18

同一競技者が連続して3回インディアカボールに触れたがラリーを継続してしまった。ネット上縁より高い位置でブロックして1回、そのボールのカバーで1回、カバーしたボールがネットに触れて1回の計3回触れたが継続させてしまった。これはブロックの接触はチームの打数として数えない(第12条第3項)と判断し継続させてしまったが同一競技者が連続して3回以上ボールに触れることが許されないとする第9条第3項に反していた。

### レフリーコード

主審の判定は間違い。

理由は、当該ケースに示されている主審の解釈通りである。

## ケース 19

Aチームの攻撃がBチームのコートのバックゾーンの副審側のサイドライン近くに打ちこまれた。主審には判定が難しかったため、副審と線審を呼び協議するが、副審はイン、Bチームからはアウトだったとの猛抗議を受ける。しかし、抗議を受け入れず、判定通りAチームの得点とし、ゲームは続行された。

### レフリーコード

主審の判定の手順は正しい。

ただし、このケースの問題点は、猛抗議をしてきたBチームへの罰則の適用である。猛抗議の段階で注意を記録しなければならない。

## ケース 20

Aチームの攻撃をBチームがブロックして、インディアカボールがAチームのコート内に落ちBチームのポイントとしたが、主審の吹笛とほぼ同時に副審からBチームのブロックした人のフットフォルトの吹笛があった。Aチームから副審のフットフォルトのシグナルに対する質問があったがフットフォルトよりもインディアカボールがAチームのコートに落ちたのが先だと判断しBチームの得点とした。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。

主審、副審同時の吹笛は、基本的には主審の判断に委ねられる。

主審は、パッシング・ザ・センターラインの反則より、ブロックのコートインが早いと判定をした事が主審の厳然たる姿勢を表わす。

## ケース 21

ネット下のアウトオブバウンズに気づかず判定してしまった。  
AチームのアタックしたボールがBチームのブロックに当たらず、ネットに当たり、Bチームコート側のネットに引っかかりAチーム側のコート内に落ちた。判定をAチームのポイントとし、その判定に質問がなかった為、ゲームを続行した。ゲーム終了後副審から判定に対する質問を受け、判定ミスに気づいた。

### レフリーコード

主審の判定は間違い。

ネット有効面を越え打ち込まれてきたインディアカボールは、相手チームが接触しない限り、ラリーの結果は打ち込んだチームの結果となる。

相手側コートに入ったことで判定を決めつけ、ボールが落ちた位置まで確認しなかった事が間違いの一因といえる。

## ケース 22

主審をしていた時の事です。  
トスが流れ、Aチームのアタッカーがどうにか相手コートに押し込みました。Bチームのコートに落ちると同時にAチームのアタッカーが大勢を崩し、ネットに触れてしまいました。判断がつかずにいると、Bチームの選手がAチームにボールを渡し、プレイが続行されました。その場でプレイを中断にし、副審に意見を求め、判定すべきでした。

### レフリーコード

主審の意見は正しい。

主審の吹笛が先か後かが判定のポイントになるが、両チームを納得させるためには副審に意見を求めるのは良い方法である。

## ケース 23

主審として、ある大会での事、両チームオーバーネット？否かのプレーが多く悩まされました。确实と判断した場合のみ両チームに対してオーバーネットの判定をくだしました。

接戦だったので後半になると両チーム言葉攻撃が激しくなってきました。インディアカボールがデッドになった時、両チームのキャプテンを読んで、審判台からきちんと見ていますので勝手に判断しないようにと注意して少し落ちついてもらいゲームを続けました。

### レフリーコード

主審の判断および言動は正しい。  
良い審判姿勢のケースである。特にラリーを中断し注意をする場面について、メンバーに確認するのが望ましい。

## ケース 24

ポイント後、レシービング側のポジションを確認し、サービスのシグナルを出したとほぼ同時位にレシービング側の選手がモップをかけたので、ホイッスルを吹いてゲームを止めて、ノーカウントにした。

急いでサービス許可を出したつもりでは無かったが、足元もしっかり見る事、注意する様、自分に言い聞かせた。

床をふいた選手には審判団の許可を得て行なう様伝えた。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。  
プレイヤー自身がモップをかけることは原則許されません。副審の管轄下で行われます。このケースは副審の監視課下にありますから副審が素早く対応をしなければなりません。もう一つの問題点は、サービスの直前に、許可なくプレイヤー自身がモップをかけたことに対して、罰則として注意を加算することである。

## ケース 25

主審の際、相手がアタックをうち、そのボールをブロックした際、ネットにひっかかってしまい、一定そのままだったためノーカウントをコールしましたが、その後、インディアカボールが何らかのはずみで、コートにおちてしまいましたが、そのまま、ノーカウントを意思表示したので、そのままゲームを進めました。

### レフリーコード

主審の判定は正しい。

インディアカボールがネットに引っ掛かり静止したと判断する時間の目安は、定められていません。引っかかった瞬間、面側のチームのプレイヤーの動作が一時的に止まり、プレイの連続性が切れた時と考えられる。

## ケース 26

ラリー中、Aチームのアタックが、Bチームのネット側に添って落下した所がAチームのコートでした。その時、Bチームはワンタッチなしでしたが、Aチームのポイントにしてしまいました。

### レフリーコード

主審の判定は間違い。

ネットを越えたインディアカボールは、相手チームが接触しない限り、ラリーの結果は打ち込んだチームの結果となる。

ボールが床に落ちるまでよく見ることが基本である。

## ケース 27

Aチームのプレイヤーが3打でアタックしたがネットに引っ掛かり静止した。主審の吹笛前に再度ボールをヒットし相手コートへの返球を試みたが、ボールはネットに静止したままだった。主審は計4打目でのネット引っ掛かり静止のため、Bチームのポイントとした。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。

ネット引っ掛かりを静止と素早く判定しなければならなかったが、連続性のプレイの結果を判定したことは正しい。

## ケース 28

男子大会で主審をしていた際、オーバーネットのことで、強い口調で意見を言ってくる人が多かった。態度も併せてだが、女性の主審だからと言って、強い口調や態度で威圧されたと思う。ただ、威圧されてからと言って、ジャッジは変えなかった。

### レフリーコード

主審の精神は素晴らしい。

主審に対する喧噪にあたる言動と捉えたら第18条・第19条を適用しなければならない。もし罰則を与えなければ、ゲームはフェアでなくなる。

## ケース 29

ラリー中にAチームからのアタックに対して、Bチームの前列の選手がブロックに行ったが、間に合わず、ネットギリギリで両手を上げてインディアカボールにさわったが、ネット上縁より低い位置だったので、ブロックではなく、1回目のプレーとして数えて、2回目のプレーでも両手を使ったので、ダブルコンタクトの反則をとった。

Bチームの選手は不思議な顔をしていたが、とくにキャプテンからの質問もなかったなので、ゲームを続行した。

### レフリーコード

主審の判定は正しい。

ゲーム参加者は、ルールを熟知しているものという姿勢で判定をするのが基本である。

## ケース 30

ブロックですが、オーバーだったように見えたが反則を取らずにそのままゲームを続行させました。

### レフリーコード

主審の判断は正しい。

“オーバーだったように見えたが”だけでは判定しません。確実に見切ったプレーのみを判定します。

## ケース 31

2打目のインディアカボールがポールに当たって跳ね返り、4打目で相手コートに返球された。相手チームからオーバータイムズではとの声が聞こえてきたが、当たったところが、ネット範囲内だったので、ゲームを続行した。

### レフリーコード

主審の判定は正しい。

特にネットアンダーロープ付近のポールの場合は、主将からの質問に答えた方が雰囲気はよくなる。

## ケース 32

サービスの順番に間違いがあったことに気づかずに試合が進み、サービス権が移ったとき、サーバーがレシーブの位置が前回のサーブした時と違うと言って、ローテーションミスが発覚、記録係りがなく、どこまで遡れば良いかわからないので、ローテミスした反対のチームに1点を入れて、正しい位置にローテーションを戻した。

### レフリーコード

主審の判定は間違い

このケースの問題点は、主審が相手チームのローテーションミスと申し出たサーバーを基準に位置の確認をしていないかということである。例えば、当該サーバーが間違った位置にいたのかも知れないからである。

サービス順の間違いの基本的な処理は、サービス権が移る前に遡ってポイントの移動はありません。間違った状態でサービスをしているチームが得ている得点のみが無くなり、相手チームに1点、正しいローテーションにして再開します。



### ケース 33

オーダー表に記入されているゼッケン番号と実際にプレーをする人物が違って  
いた。試合前(プレーボール前)に副審がチェックをしてOKのサインを出した  
が、実はこの時にチェックミスでプレーが始まってしまった。途中オーダー表の  
確認(記録係)をしている係が間違いに気づいた。それまでにすでにプレーがか  
なり進行していた。(副審、記録係共にここまで気づかなかった)  
主審は副審と両キャプテンを集め事情を説明し、了承を得て正しいオーダー表  
を提出しなおしプレーを続行させた。

#### レフリーコード

主審の競技運営は間違い。

このケースの問題点は、提出されたオーダー表の訂正は許されないに  
もかかわらず訂正したことである。また、審判員は、プレイヤー番号を基  
準に確認するが、本人と番号の確認はしていないのが殆どである。

あり得ないが、審判団のミスとして、最初からゲームをやり直しとする。

### ケース 34

オーダー票の提出が不要で、記録係不在の市民大会での事でしたが、  
ゲーム途中で、ローテーションミスがあったように思いました。どのタイミングで、  
どちらのチー  
ムによるものか、判断できず、各チームからの質問もなかったため、反則を取るこ  
となく、ゲームは終了した。

#### レフリーコード

主審の判断は間違い。

ゲーム進行は、判定に必要な問題点(疑問)を事前に解決・確認するこ  
とが基本である。よってローテーションミスの疑いを抱いた時点で、副審  
とで確認するレフリータイムを宣告しなければならない。

### ケース 35

副審からのアンタッチのシグナルに気づかずラリーを継続してしまった。

#### レフリーコード

主審の判断は正しい。

副審は、第23条第3項の3でラリー中のアンタッチを判定するため  
吹笛しなければならない。主審が気づかなければラリーは続くことにな  
る。

## ケース 36

Aチーム側のアタックをBチーム側はオーバーネットの状態ブロックしたが、ブロックには、かすっただけでプレーは、続行され、Bチームの得点となった。Aチームからのオーバーネットに対する質問はなかったためゲームは続行された。

### レフリーコード

主審の判定は間違い

“かすっただけで”の意識は、あきらかにオーバーネットの見逃しになる。

## ケース 37

平成29年9月からのルールブックの全面的な構成の見直しと一部改訂での試合のトラブルはあまりなく(最始サービスとレシーブコートの選択は戸惑いありましたが)スムーズに進行しています。

### レフリーコード

競技規則の改訂及び構成の見直しは、ルールを分かりやすくすることと、インディアカ競技の将来を見据えて行われたものです。

サービスおよびコートの選択順が整理できれば、あとは慣れです。

## ケース 38

自分たちのチームが試合中の出来事です。主審がサービスの吹笛をし、Aチームがサーブをしようとしていたと同じタイミングで、Bチームが副審にタイムアウトを申請した。Aチームのサーバーはサーブを打ったが、Bチームはレシーブ態勢に入っていなかったため、Bチームのコート内にボールがインした。Bチームはタイムアウトを申請したからノーカウントだ、と主張した。結局、主審はノーカウントにしたが、主審はAチームのサービスの吹笛をしているので、ノーカウントはおかしいのではないか？(Aチームは試合中断をしたくなく、主審が困っている様子だったので、主審のノーカウントに応じた)

### レフリーコード

主審の判断は間違い

このケースは、あってはならない、審判団の連携ミスの典型的な状況です。副審は、主審がサービス許可の体制に入ったら、タイムアウトの要求を拒否しなければならない。Aチームの申し出は正当な申し出であるが、審判団のミスとして理解してもらえない。

## 2. 副審・線審

### ケース1

Bチームの監督が選手交替の要求した為、選手交代を行ったが(副審の近くに1名とベンチで複数の選手が準備していたが)監督は競技者交替の数を示さなかったため1名のみ選手交替を行い。監督に複数の競技者交替を行う際は、次のインプレーの状態でない時競技者の数を示し、交替競技者は副審の近くにいるように伝えた。

### レフリーコード

副審の判断は正しい。

但し、ルール第5条第2項の適用から、副審がゲーム中に片方のチームにルールを指導すると公平な状態を崩すことになる。ゲーム終了後にすべし。

### ケース2

一方のチームがタイムアウトの要求した時に、チーム外のメンバーが輪の中に入り会話していたので、主将に通告し、コートから出てもらった。

### レフリーコード

副審の判断は正しい。

タイムアウトはラリーの一時中断時間である。プレイヤーと会話できるのは監督と主将に限られている。

### ケース3

Aチームがメンバーチェンジを求めたが、交替競技者の準備が不十分だった為、拒否した。

### レフリーコード

副審の判断は正しい。

ルール第13条第2項第3項を適用し、競技者交替は、ラリー中断中に遅滞なく行わなければならない。

#### ケース 4

副審をしていた時、Aチームへのサービスの許可とBチームからのタイムアウトの要求が同時くらいの吹笛となってしまった。サーバーがサービスを止めた為、タイムアウトが認められた。

#### レフリーコード

副審の判断は間違い。

副審は、主審がサービス許可の体制に入ったら、タイムアウトの要求を拒否しなければならない。

#### ケース 5

副審をしている時、Bチームの女性が相手チームの攻撃を遅れてブロックしたとき、手をかすめた音は聞こえたが、パッシング・ザ・センターラインをチェックしていたので、確認できなかった。その後、Bチームは3回のプレーでスパイクを決めポイントとなった。試合後、主審に確認したところ、女性のブロッカーがネットより下だったので、手に触れたか判断できず、オーバータイムスか迷ったといていた。

#### レフリーコード

副審の判断は正しい。

ネット付近の監視は、主審と副審で役割分担をする。ネット上縁のブロックプレイは、主審の判定領域である。また、判定は、事実(見切ったもの)だけを取扱う。

見切れるようにラリーの状況や見る角度、方向を工夫することが必要です。

#### ケース 6

副審の任務遂行中、レシーブの際、二人が触れ、四打目で返球したことに、主審が気付かなかった。四打目のサインを出したが、主審が気付かないまま、試合が進んだ。

#### レフリーコード

このケースの場合は、副審のサインの出し方に気を付けなければならない。副審は、ルール第23条第3項を遵守する。

## ケース 7

線審での任務遂行中のできごと(副審の判断の可否)

アタックに対するブロックが決まり、ブロックのポイントを主審が指示した。相手チームのブロックがオーバーネットであるとして、アタックをしたチームの主将から主審に対し、発言がなされた。

主審は、副審を呼び意見を求めたところ、副審は、オーバーネットであると回答した。主審は、これを採用し、ブロックをオーバーネットとし、アタックチームの得点に変更した。ブロックをしたチームからは、特段発言がなく試合は続行された。

### レフリーコード

主審の判断は間違い。

ネット上は主審の判定領域である。チームワークの悪さを指摘したケースである。副審に意見を求める必要はない。ブロックを「オーバーネット」と回答した副審の権限と責務の再確認が必要。

## ケース 8

自分が、副審を遂行中の試合において、Aチームからのサービスに、線審は、フットフォルトのシグナルを示したが、主審はそれに気づかず、ラリーが続いていた。そのラリー中に、線審は副審に歩み寄り、フットフォルトがあった事を伝えた。ラリーの結果、Bチームのポイントとなり、フットフォルトのシグナルに対する質問がなかったので、主審にその件を伝えることなくゲームは続行された。

### レフリーコード

線審の行動は間違い。

ゲーム中に線審が所定の位置を離れることは許されない。線審は主審の要請により話しかけることができる。

ラリーの結果は、Bチームのポイントとなったので質問は無かったが、正しいラリーの結果になっていないことを主審は認識しなければならない。

## ケース 9

線審でボール落下地点で主審と私のジャッジが相違が発生しました。私はアウトと思い旗を上げましたが主審がインとジャッジしたので不満でしたがその後タイムアウトを取り主審と話し合いインということでゲームを再開しました。

### レフリーコード

このケースは、線審と主審の連携の重要性を表わしています。主審は他の審判員の判定を覆すことが出来ます。例えば線審の位置が担当ラインから離れていた場合は連携が図れません。

線審の判断を確認する主審の態度は正しい。

## ケース 10

〈線審の任務遂行中〉

サーブの際、サーバーがエンドラインを踏んだため、ジャッジをしたが、主審は羽根を追いかけて見ていたため、相手(反対)側のコートに目線が行き、気付かれなかった。

### レフリーコード

このケースは、主審の位置からみて線審の位置が左側の場合は、線審のシグナルが確認できないことがあります。このことを踏まえ主審は、サーバーと線審を見るように心がけなければなりません。

### 3. その他

#### ケース1

ルールの改正により、主将と監督はサーバー順を副審に確認できるようになった。記録席のない中に、サーバー順を確実に把握するため独自のツールを活用している。

#### レフリーコード

サーバー順を副審に確認できるが、このルール制定の基本的な考え方は、チームはサーバーの順番を守るのが前提であり、たまたま、分からなくなっただけに確認を求められたら、教えることが出来るという考え方で

す。  
また、いろいろと道具を使い活用することも考えられますが、役割は副審が行うべきです。(第23条、第3項7.)

#### ケース2

2017年の全国シニア大会で胸番のないチームが出場しました。全国大会で番号のないチームの出場をインディアカ協会は認めているのか、JIAのルールのあり方がどうなっているのか審判する人に説明してほしい。

#### レフリーコード

ルールのあり方が問われるならルールは絶対である。主審は、第4条第4項に違反するチームが出場しようとするゲームを担当した場合、コート参集時に対処しなければならない。

このケースはあってはならないケースであり、主催者(JIA)は、大会参加要項に明記しなければならない。

### ケース 3

コーチングエリアでの声援、行動で、これはルール違反、マナー違反は？

例一1 相手チームからの返却羽根がアウトエリアに落ちると判断したので「アウト」と味方に伝える。……コーチングエリアも選手と一体化しているので自然に出てしまう言動である。

例一2 相手のブロック人数を(1枚、2枚)をアタックするときにアドバイスすること。

例一3 サーブの打ちどころを指示すること。

例一4 レシーブの位置など、フォーメーションの指示をすること。

例一5 相手のアタックがフェイントと分かったので、味方に「フェイント」と教えること。

どのような言動が指導要因となるか？

### レフリーコード

ルールは、コート外の定められた場所がチームベンチで、参加者は動くことなく、そのベンチにいななければならない。但し、コーチングエリアは監督のみ第5条第2項の6“競技の進行を妨げることがなければ”動いてプレイヤーへの指示は許されると定めている。例1～5について監督は許されるが他の参加者は許されない。

### ケース 4

昨年の研修会にて現在公式ハンドシグナルも写真付きで見やすくなったと指導を受けたが、インターフェアの公式ハンドシグナルがないため現在検討を行っていると聞いたが、その後公式ハンドシグナルが決定していれば教えてほしい。

### レフリーコード

2017年9月のルール改正後の適用事例を参考にして、ハンドシグナルの必要、不必要を検討する。



## ケース 5

副審をしていてローテーションのトラブルが多いと思うし、私もやりにくいです。

### レフリーコード

ローテーションは、インディアカゲームの特徴の一つであり、ラリー開始のプレースタイルでもあるので、自分なりの監視方法を会得するしかありません。

記録員がいても、サーバー確認は副審もサーバー確認はする姿勢でいてください。

## ケース 6

9月からの規則改正の1つで、「主将または監督は、サーバー順の確認をすることができる。」という事で、副審に確認される場面が増えたように思います。副審の動作に関係なく聞かれますので、レシービングチームのポジション確認に入ってからには受け付けられない様にとは思っていますが回答タイミングが難しいです。

### レフリーコード

主将または監督は、サーバー順の確認をすることができるというルールは、サーバー順の管理はチームの責任であることを前提としている。試合に夢中になり、分からなくなったときに、試合をスムーズに進めるためのものであることを認識しなければならない。

主審がサービスの許可をするタイミングでは、拒否する審判姿勢は一つの方法と考えられる。

## ケース 7

クレーム等は経験なし、気になることは、サーブ者が音のしないサーブを打った時、ヒットしていないのでないかといつも思う。多くはないが、大会中に1人ぐらいい見受けられ、ルール上何か決めておくことが必要と感じている。

線審とのコミュニケーションというか？線審がキチンとしているかどうかも気になっているところである。主審として全体をしっかり把握して審判を今後もしていきたい。

### レフリーコード

サービスの実行は、ルール第10条第4項に定められている。ここでいう「相手コートに打ち込む」というプレーが、たまたま打つ音がしたサーブサービス、あるいは、たまたま打つ音がしなかったサービスと考えられる。今後の研修で共有しなければならないでしょう。

線審とはゲーム開始前にコミュニケーションを深める必要があります。

## ケース 8

新ルール適用試合で、ネットよりも手が出ていなかったにもかかわらず、ブロックと見なして、後3打をカウントしてしまった。

### レフリーコード

ルール改訂がラリーに直結する場合は、良くあるケースです。レフリーとして重要なのは、自覚されていることです。

判定時の姿勢として、見る視線の高さ、位置を再認識してください。

## ケース 9

記録係は試合を見て、主審のシャツを確認し、記録も見ながら記入するので、時間がかかります。まちがいを副審につげようと声を発したが聞こえず、そのまま続行しました。

### レフリーコード

副審の任務、ルール第23条第2項の2に「記録係の任務をコントロールする。」と定められている。これは記録員の任務遂行がスムーズに行われることも含まれています。記録係りの経験を積むことで上手くできることを確信します。

## ケース 10

〈副審の任務遂行中〉

副審の際のオーバーネットのジャッジは、ハンドシグナルのみのため、主審に気づかれないケースが多かった。オーバーネットの認識が人それぞれ違いすぎて、困惑することが多かった。

### レフリーコード

ネット上縁のオーバーネットの判定は主審の領域、副審は第23条第3項の3.の規定でネット下のオーバーネットを判定しなければならない。

## ケース 11

9月からのルール改正により、相手側コートから飛んでくるインディアカボールおよびブロッカーに接触したボールにかぎり両手を使ってプレーすることができる。但し、インディアカボールをネット近くで、ネット上縁より高い位置で阻止するプレーであり、問題点としてネット近くで主審の判断にゆだねられることにより、主審により近くという距離が、違う為主審がやりづらいという意見が多々ありました。私としては、主審の判断で、処理する方法しかないと思います。

### レフリーコード

ネット付近のプレーには、ブロックプレーとブロックの試みがある。この2つのプレーの区分は、ネット上縁以上の空間のプレーはブロックプレーとし、それ以外の空間では、ブロックの試みとレシーブプレーとなる。

主審の判断と処理の方法は、他の審判員との一定の判定基準が必要になるので、研修会で共有する必要があります。

## ケース 12

レシーブされたインディアカボールが、副審側のネットの外側に向かって飛んで行った。前列ライトのプレイヤーが追いかけ片足がセンターライン想像延長線を越えた姿勢で自コート側にパスをした。その瞬間に「片足がセンターライン想像延長線を越えた」という理由で吹笛があった。

### レフリーコード

センターライン想像延長線を越えた、つまり、ネット外側（ポール外側）を通過したインディアカボールはアウトになる。プレイヤーがセンターライン想像延長線を越え相手側フリーゾーンに侵入することは許される。

よって、プレイヤーがセンターライン想像延長線を越えて、インディアカボールセンターライン想像延長線を越える前に自コートにパスするプレーは許される。

インディアカのケースブック 2017年度版

2018年12月 発行

一般社団法人日本インディアカ協会